

英語の苦手意識克服をめざして —石巻専修大学における英語多読・多聴授業の実践報告—

大縄 道子

Extensive Reading and Listening Classes at Ishinomaki Senshu University

Michiko OHNAWA

1. はじめに

英語多読とは、一語一語の単語の意味や文法事項にこだわらずに、文章全体の概要をつかむことを優先して、できるだけ多くのやさしい英文を読む方法である。理解できる英語を大量にインプットすることにより、自然な形で英語の感覚を身につけ、英語を和訳せずに直読直解できるようになることを目指すものである。

従来の文法訳読式の精読では、単語の意味と文法の知識を組み合わせて英語を処理することが多い。この方法は知識を組み合わせることによっていろいろな文を読んだり作ったりできるというメリットがある一方で、正確さを重視し、すべてを日本語に直して理解しようとするため、限られた時間のなかではどうしても英語のインプット量が限られてしまう。流暢さ (fluency) を向上させるための練習はほとんどなされていないというのが現実であろう。しかし知識として持っていることと使えることとは別であり、文法事項や単語を覚えても、そのうちに忘れてしまったり、自分で使うことはなかなかできなかつたりということが起こってくる。日本語に直していると時間がかかり脳の負担も大きいため、とっさの処理が必要な英会話やリスニング、長文を全体の流れを意識しつつ読むことなどは非常に難しいこととなる。

従来の英語教育法のもう一つの問題点として、論理的な思考や暗記を苦手とするタイプの生徒は授業についていけなくなりがちで、落ちこぼれや英語嫌いが多く生まれてしまうことがある。中学1、2年生で習うごく基本的な文法や単語を身につけないまま大学に来る学生は驚くほど多く、石巻専修大学も例外ではない。彼らの多くが英語に対して自信をなくし、苦手意識を強く持っている。しかし一方で、英語に対してあこが

れの気持ちはあり、洋楽を好んで聞いたり、興味がある分野なら英語のウェブサイトを読んだり雑誌を見ていたりもする。

筆者は2005年度に本校に着任して以来、英語多読を授業の一部に取り入れてきたが、従来の教育方法とまったく異なるアプローチをとる英語多読は、文法訳読式の足りない部分をちょうどうまく補ってくれるものだと考えている。大量の英語に触れることで、一度理解した文法や語彙の具体的な用例に何度も触れることができ、実際の使い方がわかったり身についたりする。英語嫌いで文法知識がない学生でも、ごくやさしい本から読み始め、本の内容を理解し楽しんでいくうちに、英語に対する抵抗や嫌悪感を減らし、自然に少しずつ力をつけることができる。各自が自分のレベルに合ったものを各自のペースで読む英語多読法は、学生間の習熟度ややる気の差という問題も解決し、スローラーナーも安心して自分のペースで取り組むことができる。

2008年度には、それまで行なっていた英語多読に加えて、石巻専修大学研究助成を受けることによって、新たに多聴活動にも取り組むことができた。本稿では、英語多読・多聴法の紹介も含めて、2008年度の授業の実践報告と考察を行ないたい。

2. 英語多読でどのような力がつくのか

酒井が提唱し、SSS 英語多読研究会がすすめる100万語英語多読法は、誰でも非常にやさしいレベルから始めるということと、読書量が従来の英語教育とは桁違いであるということに特徴がある⁽¹⁾。2006年に中学で採択数が最上位であった検定教科書の3年間の述べ語数が6,248語、高校の2006年度版で最も語彙が多い教科書で

34,751語であるのに対して⁽²⁾、100万語多読法は名称通り100万語を一つのマイルストーンに設定している。ただし学校での1年間の授業にとっては100万語という数字は非常に高い目標であり、実際は平均10-20万語の範囲であることが多い。

では英語多読によってどのような力が伸びるのであるか。新たな語彙が獲得できるかどうかは、その人の語彙レベルと読書量次第である。Nation (2008) は、多読によって新しく語彙を身につけるには、未知語が2-5%未満の本を読み、特定の未知語に繰り返し接ししなければならないと述べている⁽³⁾。基本語ほど頻繁に出会うことができるため、多読によって身につけやすいということになる。

多読が特に有効であるのは、既知の語彙や文法の定着である。一度学んで理解した文法や意味の分かる単語に、意味のある文脈のなかで何度も触れることにより、実際の使われ方がわかったり、使うことができる英語として定着していったりすると考えられる。各単語の核となる意味だけでなく、どのような語と共起するのかといった連語的な知識が増すことも、多読の重要な効果の一つとして指摘されている⁽⁴⁾。

また、基本的な文章に大量に触れることで、何度も遭遇する語彙の認識や文解析がスムーズになり、読む速度が上がっていく。読み手の処理能力は一定なので、単語の認知や文の解析といった下位の処理が自動化されると、それまで単語の意味の理解に使われていたエネルギーが、より高度な全体の意味解釈や未知語の意味の推測などに使われるようになり、読解力が増すという⁽⁵⁾。これに加えて、多読では常に本を丸ごと1冊読むため、全体の流れを意識したり文脈を読み取ったりする力が、自然と訓練されると考えられる。

同様に、多読によって英文の処理速度が上がると、リスニング力も向上する。意味処理能力が低ければ、たとえ英文音声を認識できても意味を理解することができないが、英語を和訳せずに語順通り処理できるようになれば、聞き取れた順に理解できるようになるためである。多読によって養われるであろう、わかったところをつなげて全体を推測する力も、リスニングで有効に働くと考えられる。

3. 英語多読多聴授業の実践内容

3.1 対象クラスと学生

2008年度は2年生対象の外国語選択必修の英語Cのうち筆者が担当している1クラスと、1年生対象の英語Aのうちの1クラスで多読・多聴の授業を行なった。

英語Cの受講者は46名(経営29名、理工17名)である⁽⁶⁾。本来英語C/Dは、英語A/Bを履修したうえでさらに上級レベルの英語を学ぶためのものなのだろうが、近年は英語が苦手な学生が受講することが多い。本学は1年次のうちに履修可能な他の外国語授業で単位を取得しようとする学生がほとんどであるため、2年次に配当されている本講義を取る学生は、必要単位は足りているがさらに英語を勉強したいという熱意のある学生と、前年度になんらかの外国語授業を落としてしまい、やむを得ず本講義を履修する、語学が苦手な学生に分かれる。年々後者の割合が増えていると感じるが、アンケートで尋ねたところ、本講義受講生の84%が選択外国語単位を未取得であるとのことであった。本クラスでは授業時間全体を多読・多聴活動に充てた。

1年次の必修英語A/Bでは現在習熟度別クラス編成を行なっているが、多読を行なったのは、電子情報工学科(IE)と機械工学科(ME)の学生のうち入学時のプレイスメント試験で上位1/4に入った学生たちの英語Aで、対象学生は19名(IE11名、ME8名)であった。上級クラスなので基礎力についてはついており、授業に対する態度也非常に真面目で、授業中も常に静かであった。授業の前半はプリントを用いていわゆる精読的な読解を行ない、多読・多聴活動には毎回の授業の後半30-40分くらいを充てた。

3.2 多読用教材

授業で使用している書籍の種類は大きく分けて、Graded Readers(英語学習者用段階別読み物)、Leveled Readers(英米児童向け学習用段階別絵本)、通常の絵本、日本の物語やマンガを英語にしたものなどである。ジャンルとしては物語が多く、子どもや高校生の日常をテーマにしたもの、冒険ファンタジー、動物を主人公にしたもの、推理小説、恋愛もの、おとぎ話、古典のリラ

イトなど多岐にわたっている。ノンフィクションもいろいろな種類があり、動物の生態、歴史、色々な文化の紹介など、大人が読んでも興味深いものも多い。ほとんどの本に絵や写真が豊富に使用されており、知らない語彙があっても推測する助けになっている。

難易度は、前期は SSS 英語多読研究会のレベル分けで読みやすさレベル（以下 YL）0.3-1.5 くらいのもの、後期は 0.5-2.2 くらいのものを中心に使用した⁽⁷⁾。YL の目安としては 0.3 で 1 ページに 1 文程度、多くの学生が年間を通して読む YL0.8-0.9 はヘッドワード（その本を楽に読めるために知っておくべき語彙数）200-300 語の範囲で書かれることが多く、YL1.0-1.9 ではヘッドワードが 300-400 語くらいである。

3.3 授業の進め方

授業で使用するすべての本に YL とその本に含まれる語数を表示したラベルを貼り、ブックカートで毎回数百冊の本を教室に運び、シリーズごとに前方の机の上に並べた。受講生はラベルの情報をもとに各自が自分のレベルに合った読みたい本を選び、自分のペースで自律的な読書を行なった。読書の際には多読三原則すなわち「1. 辞書は引かない 2. わからないところは飛ばす 3. つまらなければやめる（別の本に替える）」に従うように指示した。受講生は読書記録として 1 冊ごとにタイトル、YL、語数、語数累計、本に対する評価分の★印、簡単な感想コメントを用紙に書き込み、毎週提出した。授業終了時には本の貸出しを行ない、授業外にも読書をすることを推奨した。

約 5 週間ごとに計 6 回、自分の学習過程を把握し、コントロールできるようになることを目的として、目標設定と自己評価をしてもらった。具体的には、その期間中に読んだ語数と冊数、現在どんな感じで多読を進めているか、5 週間後までの目標、前回の目標に対しての自己評価を、専用の用紙に記入した。

授業中教員はいすを持って学生の席の周りを移動し、定期的に一人ひとりと簡単な個人面談をしながら必要に応じて読み方や読むレベルについてのアドバイスを行なった。（ただし英語 A では多

読の時間が短かったことと静かで話づらい雰囲気だったこともあり、面談の機会を十分に作れなかった。）

・聞き読み

多読用書籍には朗読 CD がついているものも少なくないため、これを利用して、CD を聞きながら本を黙読する「聞き読み」を推奨した。前期はポータブル CD プレイヤーを 5 台用意し希望者に貸し出していたが、毎回 1、2 名の利用しかなかった。前年度のアンケートで CD を利用しない理由に「読みたい本に音声がついていない」「プレイヤーの台数が少ないため気が引ける」などもあがっていたため、後期はプレイヤーを英語 A の人数分である 19 台に増やし、朗読 CD つきの多読本を増やし、CD を各本の背表紙の内側に貼り付けて利用しやすいようにした。英語 C では、学生を列ごとに 3 つに分け 3 週に 1 回聞き読みの順番がまわってくるようにしたところ、当該列では 8、9 割の学生が聞き読みを行ない、余っているプレイヤーも常に誰かに使用される状況になった。英語 A では人数分のプレイヤーがそろっていたにも関わらず、音声の利用者は限られ、次第にだいたい同じ 4、5 名のメンバーが使用するのみとなってしまった。英語 A では後期にはある程度レベルが高いものも読むようになっていた学生も少なくなかったため、CD のスピードで読書すると理解できない者もいるようであった。

・シャドーイング

シャドーイングとは、音声を聞きながら、影のように音声の直後に発音を模倣して発声する練習法である。リスニング力向上に効果が高く、音声および文字のインプット処理と、アウトプット（スピーキング）とをつなぐ役割が期待できるといわれている⁽⁸⁾。英語 C では毎回最初に、英語 A では後期のみ、多読本の朗読 CD を利用して 10 分程度一斉シャドーイングをおこなった。本来は文字情報を見ずに行なうものなのだが、習熟度が低い学生も諦めてしまわないように本の該当箇所をコピーして全員に配り、同じ場所（1〜3 ページ程度）を 3 回ずつ、3 回目にはできるだけ文字を見ないようにして発音させた。

4. 1年間の読書量とテスト結果

4.1 1年間の読書語数

各クラスの一人当たりの平均読了語数は表1に、両クラスの一人当たりの読了語数の分布は図1に示した通りである（最後まで授業を受けた学生のみ対象）。1年生は授業の後半のみの実践であったが、もともと英語力がある程度ついていたことと授業外読書もまじめに行なう学生が多かったこともあってか、2年生とほぼ変わらない語数を読了した。

図2は英語Cの約5週間ごとの平均読書語数の推移を示したものである。

ほぼ同じ期間中に読んだ語数が順調に伸びていったことが、図から見て取れる。これは本を読むスピードが速くなっていったことと、徐々に長いものを読むようになったため、読書記録を書く頻度が減り、読書そのものにかかる時間が増えたことが反映されている。また最終期の伸びは、最後だということで授業外読書を含めていつも以上にがんばった学生が多かったためだと推測される。

4.2 TOEIC Bridge の結果

授業の第2回目と最終回に TOEIC Bridge の公式問題集を用いて、実力試験を行なった⁽⁹⁾。結果は表2の通りで、残念ながら受講生全体としてみると、平均はリスニングと全体がそれぞれ少しずつ伸びたものの統計的な有意差には至らなかった。

次に点数が伸びた学生の傾向を確認するために、読了語数順と多読開始時の試験点数順に上位、中位、下位の3つのグループに分け、2回の

試験結果のt検定を行なった。結果はそれぞれ表3、4の通りで、語数順では上位グループのリスニングが、多読開始時の点数順では上位グループのリスニング、下位グループのリスニングと試験全体が統計的に有意な差となった（点数別のグループ分けでは、同点の学生が別のグループに属

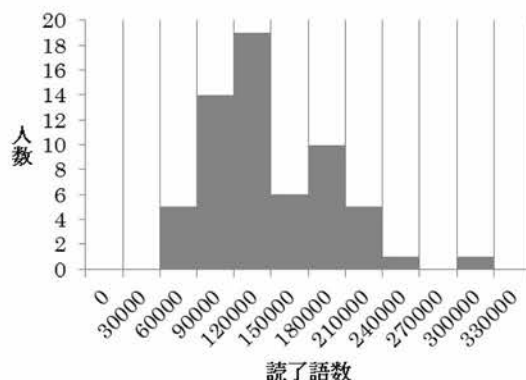


図1 一人当たり読了語数の分布

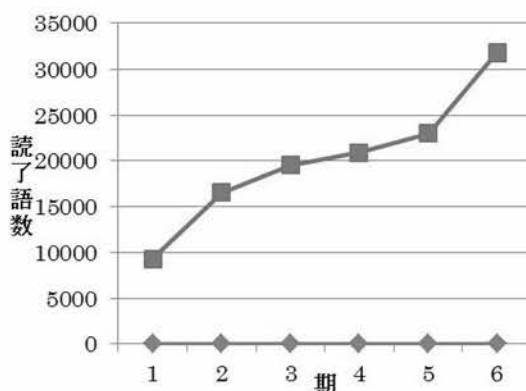


図2 約5週間ごとの平均読書語数の推移

表1 1年間の一人当たり平均読了語数

	平均	最高	最低	標準偏差	冊数
英語 C (2年以上、44名)	120308	274475	49336	49722	146
英語 A (1年生、18名)	112255	193241	30574	47647	130
全体	117970	274475	30574	48877	142

表2 受講生全体の TOEIC Bridge の結果

(L: Listening R: Reading T: Total)

L-1	L-2	L-差	R-1	R-2	R-差	T-1	T-2	T-差
26.53	28.28	1.75	24.02	24.39	0.37	50.54	52.67	2.12

表3 読了語数別 TOEIC Bridge の結果

	平均語数	L-1	L-2	L-差	R-1	R-2	R-差	T-1	T-2	T-差
上位	176,289 語	26.74	29.68	* 2.95	25.26	25.53	0.26	52.00	55.21	3.21
中位	111,427 語	27.89	29.11	1.21	24.79	24.47	-0.32	52.68	53.58	0.89
下位	70,422 語	24.95	26.05	1.11	22.00	23.16	1.16	46.95	49.21	2.26

* p<0.05

表4 初回成績別 TOEIC Bridge の結果

	平均語数	L-1	L-2	L-差	R-1	R-2	R-差	T-1	T-2	T-差
上位	131,305 語	31.05	33.10	*2.05	29.80	28.90	-0.90	60.85	62.00	1.15
中位	114,002 語	27.05	27.11	0.05	23.32	23.68	0.37	50.37	50.79	0.42
下位	111,803 語	20.94	24.17	* 3.22	18.33	20.11	1.78	39.28	44.28	* 5.00

* p<0.05

さないように、20 名、19 名、18 名で分けている)。

これらの結果から以下のことが推測される。

- (1) 年間(実質 8 か月) 10 万語強程度の多読では、いわゆる一般的な実力試験では必ずしも統計的な有意差を出すことができない。読了語数別で平均語数が 17.6 万語の上位グループのみリスニングに有意差があったことから、読む語数が多いほど効果がやすいと考えられる。(ちなみに受講生が長期にわたって多読を実践し大きな成果をあげている SEG や豊田高専では、英語力を確実に伸ばしたり TOEIC で成果を確認するためには、年間 30 万語、あるいは累計 50-100 万語の読書量が必要だとしている⁽¹⁰⁾。一方で、10 万語強程度の読書量でも実力試験で有意差を出している実践も複数ある⁽¹¹⁾。また TOEIC の点数を 300 点から 400 点に伸ばすためには専用の英語トレーニングで 200 時間、400 点から 500 点に伸ばすためには 300 時間が必要だとされていることから⁽¹²⁾、試験専用の学習を行っても、実力試験の点数を実質的に伸ばすにはかなりの時間を要することがわかる。)
- (2) リスニングの方が試験において効果が現れやすい。聞き読みやシャドーイングだけでなく多読自体からもリスニング力が向上したと思われるが、リスニングの問題の方が英文自体

はやさしいため、先に効果が点数に表れたものと考えられる。

- (3) 多読開始時の成績上位者のリスニングに効果があったのは、このグループは語数も多く読んだ人が多かったことと、もともと基礎力があったため、英文をきちんと理解しながら読む度合いが他のグループより高かったことが原因なのではないか。
- (4) 成績下位グループはリスニング、試験全体ともに有意差があったが、彼らは習熟度が低かった割に(初回テスト平均点が上位グループと 21 点、中位グループと 11 点差がある)読書量ではなかなか貢献し、中位グループとほぼ変わらない語数を読んでいる。またこのグループは 1 冊ごとの語数平均が一番低く(上位 1,152 語、中位 823 語、下位 741 語)、他 2 グループと比較するとやさしい本を中心に読んでいた。基本単語ほど頻出度が高く繰り返し接することができるため、成績下位グループは、彼らにとっては未習熟であった基本的な語彙を多読によって身につけ、試験でもやさしめの問題を解けるようになったのではないだろうか。

このように見ていくと、まずは読書語数を増やすことが重要だと思われるが、語数上位者が全員成績が伸びたわけではない。成績が伸びた学生と伸びなかった学生の違いを考察するため、語数上位グループの語数、冊数、1 冊ごとの平均語数、

英語の苦手意識克服をめざして

表5 語数上位者の読了冊数、1冊あたりの語数、テスト結果

	語数	冊数	語数／冊	L-1	L-2	R-1	R-2	T-1	T-2	T-差
受講生 1	274475	292	940	27	33	24	30	51	63	12
受講生 2	221061	95	2327	30	32	33	29	63	61	-2
受講生 3	204131	145	1408	18	19	9	9	27	28	1
受講生 4	200253	122	1641	19	17	25	24	44	41	-3
受講生 5	193241	195	991	23	32	23	28	46	60	14
受講生 6	192448	205	939	31	37	24	28	55	65	10
受講生 7	183478	116	1582	31	31	27	26	58	57	-1
受講生 8	178291	122	1461	28	30	28	21	56	51	-5
受講生 9	174417	118	1478	28	30	21	22	49	52	3
受講生 10	166338	116	1434	29	31	38	31	67	62	-5
受講生 11	165352	150	1102	24	34	20	19	44	53	9
受講生 12	163698	108	1516	36	36	26	30	62	66	4
受講生 13	153368	137	1119	23	31	16	22	39	53	14
受講生 14	152824	167	915	31	33	27	31	58	64	6
受講生 15	151716	161	942	30	29	33	31	63	60	-3
受講生 16	148969	138	1079	25	26	22	20	47	46	-1
受講生 17	146379	165	887	21	22	28	26	49	48	-1
受講生 18	139837	194	721	27	26	26	25	53	51	-2
受講生 19	139211	116	1200	27	35	30	33	57	68	11

テストの成績を表5に示す。点数が6点以上伸びた学生の欄には色をつけてある。

1冊あたりの語数の欄を見ると、1冊平均1,400語以上の本を読んでいた学生は、読了語数が多めだったにも関わらず成績が伸びていない。高瀬(2010)は、一冊あたりの語数とテストの点数の伸びを検証し、同じくらいの読書量の学生を比べた場合、やさしい本を多く読んだ学生の方が点数がよく伸び、本人のレベル以上の本を読んだ学生は成績が伸びなかったと述べている⁽¹³⁾。実力にもよるので一概には言えないが、本校でも1冊あたりの語数が1,400語以上だった学生は、内容理解が不十分な読書が多かった可能性がある。古川(2010)は英語力の伸びは「(読書量)×(理解度)⁴」に比例するという仮説を提示し、理解度の重要性を改めて指摘している⁽¹⁴⁾。読む量を増やすために理解度を減らしてしまうのではなく、未知語が少ない本を高い理解度で多く読むことが、実力を伸ばすためには重要なのだと考えられる。

5. アンケート結果と考察

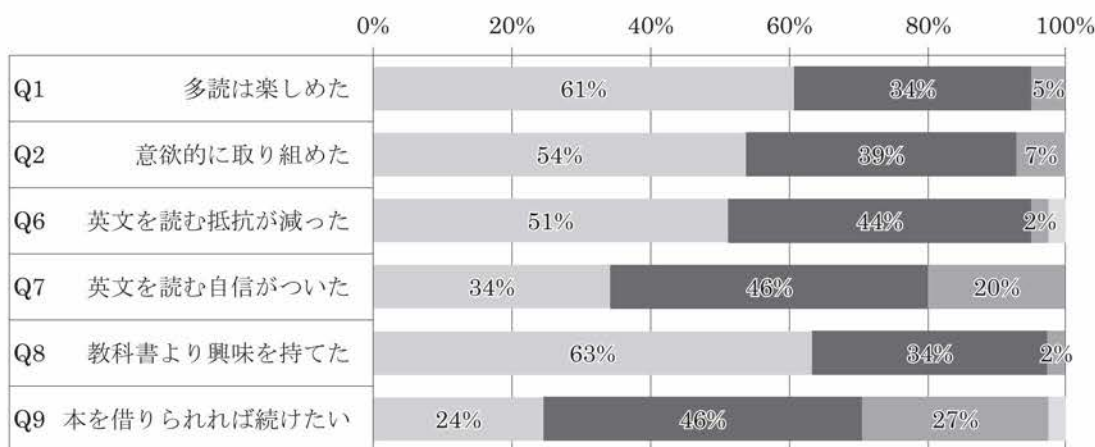
授業の終盤に英語Cの受講生にアンケート調査を行なった(回答者41名)。アンケートは無記名で答えてもらい、(a)同意する、(b)まあ同意する、(c)あまり同意しない、(d)同意しない、の4段階のリカートスケールを用いた。以下では情意面と英語力に関する質問項目を取り上げ、全学でおこなった授業評価アンケートの自由記述欄や5週間ごとに行なった自己評価の記述からも関連するコメントを紹介しながら、結果を考察したい。

5.1 情意面に関して

図3は情意面に関する質問項目の結果をまとめたものである。

Q1、Q2ともに肯定的回答が9割以上を占め、英語が苦手な学生たちも多読を楽しみ、意欲的に取り組んだことがわかる。特にQ1「楽しめた」については積極的な肯定が6割を超えている。具体的な学生の声を自由記述欄から紹介したい。「少しずつ英語に興味を持つようになって楽し

大縄 道子



■ a 同意する ■ b まあ同意 ■ c あまり同意せず ■ d 同意せず

図3 情意面に関するアンケート項目

かった。まだまだ英語は苦手だけど、この授業での経験は大きいと思う。」「1年間多読をしてみて、自分にとってはとても楽しかった。」「今まではアエラ English を読んだり、好きな洋楽のアーティストの自伝を読むくらいだった所に、もっともっと英語を読んで楽しむことができる機会を作ってもらえてとてもうれしいし、受講してよかったと思えました。ありがとう!!」「完全燃焼した感じ。1年間がんばってよかった。」

Q2に関して、意欲的に取り組めたと答えた学生にその理由を選んでもらったのが表6である。(複数回答で、選択肢はこちらで用意。)

「得意・不得意に関係なく取り組めた」「方法の新鮮さ」という項目が特に多くの受講生から選択されている。やはり自分が理解でき、取り組みやすいものであれば、積極的になれるということなのだろう。理由の上位3つは本を自分で選べるということと関係していると思われるが、自由記述でも、自分に合ったレベルと自分のペースで取り組めることを評価するコメントが少なくなかった。「本のレベルを自分で選べる所がとても良かった」「自分のペースで進められるので、どの教科よりも知識を高められた」「(良いところは)自分のペースで進められるので苦にならないところだと思います。」また、表6から、英語力の向上を実感できたために意欲的になった者も少なくなかったことがわかる。以下のコメントからもそ

表6

意欲的に取り組めた理由 (対象38名)	人数
英語の得意・不得意関係なく取り組めたから	29
今までやったことのない方法で新鮮だったから	23
多読の方法が自分に合っていたから	16
だんだん読む力がついていくのを実感できたから	14
興味を持てる本が多くあったから	12
英語の力をつけたい気持ちが強いから	9
語数の記録や自分で設定した目標があったから	4
よい成績を取りたいから	2

のことが伝わってくる。「長文に飽きてきたので短文をたくさん読んでみた。内容を理解しつつニュアンスの違いまで知れたので、英字の本が好きになってしまった…どうしよう…。」「スラスラ読めるようになり、英語が楽しくなりました。ある程度ストーリーを把握できるようになりました。もはや短文は楽勝です。力ついてうれしいです。Great thanks, teacher!!」

表7は、意欲的に取り組めなかった学生にその理由を選んでもらったものである。

中には多読を大変に感じたり飽きてしまったりした学生もいたことがわかる。授業評価の自由記述では次のような否定的なコメントがあった。「ときどき読むことにあきてしまうことがあった」「後半になると少したるんでしまった」「英語の本

表7

意欲的に取り組めなかった理由（対象3名）	人数
英語の本を読むのは大変だったから	3
1回の読書時間が長くて飽きたり疲れしたりしてしまうから	3
毎回同じことの連続で飽きてしまったから	2
力がつくのをなかなか実感できなかったから	1
興味の持てるおもしろい本があまりなかったから	1
読書語数が成績にそれほど関係ないから	1
読める本で読みたいと思う本はほぼ読んでしまったから	1
本の選択や読む量などすべてが自分に任されているから	0

は読むのつかれる」「英語力がどう変化したのかわからない」「(良くなかったと思うところは)個人で目標を決めるため、サボることもできる点。」

図3に戻るが、多くの学生が多読を楽しみ意欲的に取り組んだ結果、9割以上の学生にとって英文を読む抵抗が減り(Q6)、8割の学生が英文を読むことについて自信をつけた(Q7)。これは非常に意義深いことなのではないだろうか。「本を読み続けることで英語に対する意欲と意識は変わった。」「初めの授業よりは、相当英語への意識が変わった。」「1年間やってみて、英語の長文に対する抵抗がかなりなくなった。」「英語と聞くと拒絶感を持ってしまうが、このやり方はそんなことを感じなく、少し親しみをもった。」「今ではたくさんさんの英語と触れ合えたことで読める英語がかなりふえた。読めないものがへったため、少し自信がついた。」

Q8の多読の教材についても、非常に多くの受講生の支持を得ることができた。これはいろいろな種類とジャンルの本がそろっていたことが大きいと思われる。「色々な英語の本」があるため「広い知識」を得たり「英語の幅が広がった」ことを評価するコメントも複数あった。

続けたいかどうかをきいたQ9では、他の項目に比べると肯定の割合が下がっている。やはり授業以外ではやりたくないというのが本音の学生も多そうである。一方で強い肯定が1/4近くいるのも見逃せないことである。次のような具体的なコメントを残した学生もいた。「これを続け

たいが、図書館にも入れて、それを含めて記録用紙に記入できないか。3、4年生になっても続けるような環境を。」この環境を作れていないのが心苦しいが、受講生には授業終了時に「続けたい人はいつでも研究室に借りに来て下さい」とは伝えてある。実際に借りに来て継続するのは、年に1、2名であるが、現在は4人の学生が、授業とは関係なく定期的に本を借りに来ている。

5.2 英語力の向上について

英語力向上に関する項目の結果を図4に示した。

Q10では、弱い肯定も含めて9割の受講生が英文を読むのが速くなったと答えている。自己評価や自由記述でも「すらすら」読めるようになったというコメントは多い。他にも「今までよりも格段に速く読むことができるようになった!ただ読んでいても良く分かるようになるのはすばらしいですー。」「英文を読む・理解するのが明らかに速くなったと思う。」など。

Q11とQ12では、読解力が向上したかどうかを判断するためにレベルの上昇と理解度の変化を尋ねているが、両項目ともに肯定的な回答が多かった。TOEIC Bridgeでは必ずしも試験結果に効果が表れなかったが、多くの受講生が以前は読めなかったレベルの本を読めるようになったり、内容の理解度が上がったりはしており、学生自身の実効感はかなりあることがわかった。授業内の自己評価でも次のようなコメントがあった。「レベルが高くなるにつれ、難しい内容の本があるが、読んできた成果なのか、内容がよく理解できる。」「YL2.0の本を読んでみたが、おおまかに内容も理解できた。この授業が自分の力になったことが実感できる。」「最初のころに比べたら、英語のすべての能力がアップしている。英語の本がおもしろいと思える時がある。」「英語のWEBサイトも抵抗なくなった。動画で言っていることも雰囲気ならつかめるようになった。」スピーキングへの効果を報告してくれた学生もいた。「外人と音声通話やチャットがスラスラ出来るようになったのは、この授業のおかげでした。」また、他の英語の授業で効果を感じたというコメントもあった。「自分は今年、コミュニケーション英語

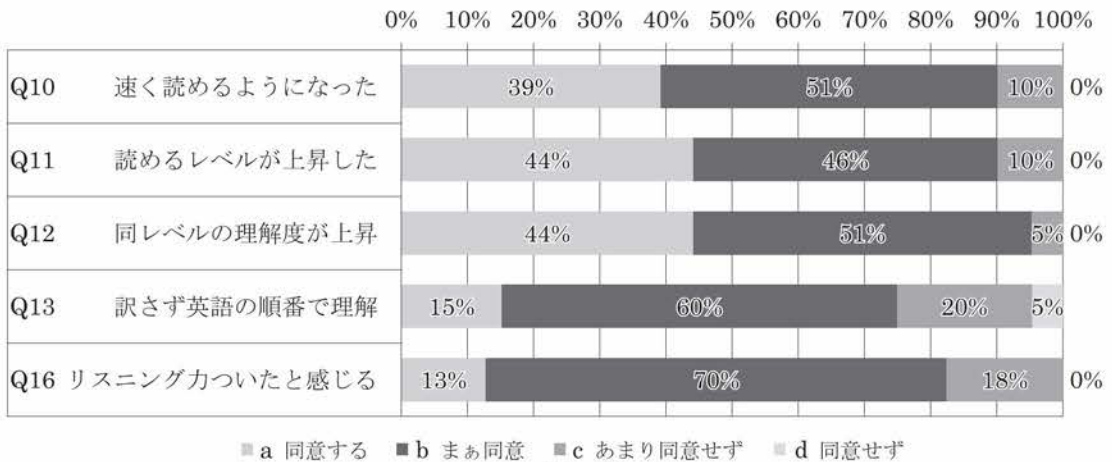


図4 英語力向上に関する項目

もっているけど、そっちの方へ良い影響があった。リーディングテストが50点満点中48点だったのはうれしかった。」「英語Dの授業での和訳が、調べる前に単語の意味を予想できるようになり、調べたたくさんの意味の中から最も合う語を選択できるようになったと思う。Communicationで言葉が会話の時、つまらずにできるようになったと思う。」

Q13では英語のまま直読直解ができていないかを問うているが、この項目では強い肯定の割合はかなり低い。試験の分析でも触れたが、この割合を増やしていくことが今後の課題と言えそうである。方法としては、一つには読む語数を増やすことであろうが、高瀬（2010）もいうように、初期の段階できわめてやさしい本を集中して読ませ、和訳する癖を抜くことも重要であろう⁽¹⁵⁾。最後のQ16で尋ねたリスニング力の向上感については、全体としては肯定的な回答が多いが、強い肯定は13%にとどまった。

5.3 聞き読みに関して

今年度初めて聞き読みを本格的に導入したため、聞き読みに関する意識調査も行なった。図5は聞き読みをどの程度行なったかを尋ねた結果である。

次に、聞き読みを「積極的に」もしくは「ときどき」行なったと答えた学生を対象に、聞き読みの感想と効果について尋ねた結果を表8と表9に

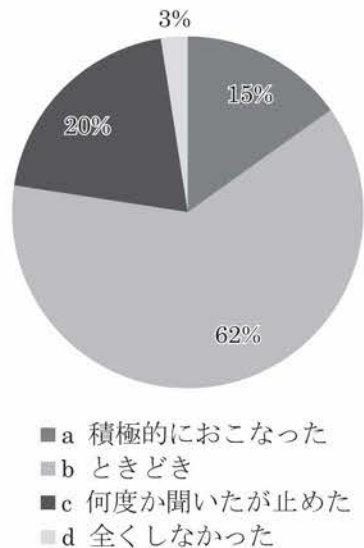


図5 聞き読みをどの程度行なったか

示す。（いずれも複数回答で、選択肢はこちらで用意。）

「聞き読みした方が読むだけより楽しめる」を選んだ学生が多かったが、効果音が入っていたり、ナレーターが感情をこめて読んでいるものも少なくないためであろう。他にも全体として、聞き読みした方が「理解しやすい」「難しい本も読める」「速く読める」「疲れない」といった肯定的な選択肢を選んだ学生が否定的な選択肢を選んだ学生よりも多く、後期になって始めた聞き読みも、英語Cにおいては概ね受け入れられたこと

英語の苦手意識克服をめざして

表 8

聞き読みについて（対象 31 名）	人数
聞き読みした方が、読むだけよりも楽しめる	23
聞き読みした方が、読むだけよりも本の内容が理解できる	13
聞き読みした方が、難しめの本でも読めてしまう	12
聞き読みした方が、自分で読むよりも速く読める気がする	12
聞き読みした方が、長時間やっても疲れない	9
CD の速度では、本の内容をあまり理解できないことが多い	5
聞き読みした方が、読むだけよりも疲れる	3
CD の速度が自分が読みたい速さと合わずにイライラする	2

表 9

聞き読みの効果（対象 31 名）	人数
英語を聞くことへの抵抗が減った	17
リスニング力が上がった気がする	16
聞き読み自体がだんだんラクになった	12
発音を知らなかった単語の発音を覚えた	11
読むだけの多読自体もしやすくなった	7
日本語に訳さずに英語の順番で理解しやすくなった	6
特に変化はなかった	2

がわかった。授業で観察したり学生と話してみたりした印象では、最初は面倒だったり自信がなかったりして気が引けていたが、聞いてみたら理解できた、楽しかった、読みやすかった、という反応が多かったように思う。聞かず嫌いも少ないので、まずは取り組ませてみることも大切だとわかった。

聞き読みの効果についても（表 9）、リスニング力に関する複数の項目が選択された。自己評価のコメントにも次のようなものがあった。「聞き読みを多くしているおかげか、本を見ながらではなく、CD を聞くだけで大体内容が理解できるようになった。」「けっこう難しい本も CD があればだいたい分かるようになってきた。CD は聞いているだけで日本語にしなくても勝手に頭に入っている感じ。」アンケートでは数は多くないが「多読自体もしやすくなった」「英語の順番で理解しやすくなった」という選択肢も選ばれており、聞き

表 10

何度か聞いたが止めた理由（対象 8 名）	人数
自分のペースで読んだ方がきちんと読めるから	4
CD の速度では、本の内容をあまり理解できなかったから	3
聞き読みすると疲れるから	3
読みたい本に音声がついていなかった	3
CD の速度が自分の読みたい速さより遅いから	0

表 11

まったく聞き読みをしなかった理由（対象 1 名）	人数
CD の速さでは理解できないから	1

読みが直読直解の力をつける助けになりそうなことも確認できた。

聞き読みを「止めた」もしくは「まったくしなかった」学生にその理由を選んでもらったのが表 10、11 である。

これによると、CD の速さでは英文が十分に理解できないというのが主な理由のようである。英語 A であまり CD が利用されなかったことも合わせて考えると、やはり聞き読みも多読の初期のうちに導入するべきだと言えそうである。

6. まとめと今後の課題

以上の考察の結果、2008 年度の多読・多聴授業について次のようにまとめることができる。

- (1) 習熟度が低く英語に対して苦手意識が強い学生も含めて、英語の多読・多聴授業には大部分の受講生が楽しく意欲的に取り組み、その結果、英語に対してより積極的な感情・態度を持てるようになった。
- (2) 英語多読を 12 万語程度行なうことによって、大部分の学生が、速度、レベル、理解度の向上に関して実効感を持った。
- (3) TOEIC Bridge では、全体としては多読前後の点数に統計的な有意差は出なかった。読了語数と初回の試験結果によりグループ分けして検定すると、読了語数の上位グループ、習熟度の上位グループのリスニング、下位グループの試験全体とリスニング力に有意差が

出た。

よりよい多読・多聴授業を実践するために、今後の課題として以下のことをあげたい。

＜授業実践に関して＞

- (1) 受講生の読書量をできるだけ増やすように努める。多読の成果を確実に出すには、より多くの読書量が必要である。一番望ましいのは多読を2年3年と続けられるような仕組みを作ることだと考えるが、一年間の授業の中でもさらに読書量を増やせるよう工夫したい。教材をさらに充実させて多読（多聴）しやすい環境を整えたり、短い本を読むことが多い初期の読書記録を簡略化することなども考えられる。
- (2) よりやさしい本を多く読ませ、英語の直読直解力をつけることを目指す。語数を増やすことだけを求めるような読書では力が付きにくいことを学生によく説明し、初期の段階でぐくやさしい本を大量に読ませ、和訳する癖が抜けるような指導をする。
- (3) 朗読CDつきの多読用図書を増やし、多読の初期の段階から聞き読みにも取り組ませる。本だけでなく、音声もいろいろなレベルやジャンルのものをそろえ、初期の段階で聞き読みを導入することで、聞き読みを積極的に行なう学生も増えるだろう。聞き読みを多く行なうことで、リスニング力が伸びるだけでなく、読むときにも直読直解をしやすくなると考えられる。
- (4) 個人指導を充実させる。個人の實力、読書状況や好みなどを把握して、個人個人に応じたよりきめ細かい指導をできるように心がけたい。定期的にすべての学生と話す状況を作り、難しすぎる本を読んでいる学生の軌道修正も早めに行なうようにしなければならない。そのためには英語Cに関してはクラスサイズをさらに小さくすることが本来は望ましいのだが、受講希望者が多い現状では難しいところである。

＜リサーチ方法に関して＞

- (1) 学生が感じている實力の伸びを、客観的に示すことができるよう努めたい。力の向上が反映されやすい、學生の實力レベルに合った試験や、多読で伸びやすい力（速度、全体を理解する力など）が反映されやすいものを探し、場合によっては作ることも必要かもしれない。また2回のみを受験で實力の伸びを断定するのは難しい場合もあるので（特にレポートやテストが重なる授業終盤は受講生が疲れており、真面目な學生が試験中うとうとしたりしている）、比較的短時間でできる試験を年に何度か行なうことも考慮に入れたい。
- (2) 今年度は聞き読みの記録を特にさせなかったため、どの學生がどの程度聞き読みを行なったかというデータがなかった。今後は読書記録用紙に聞き読みの欄を設け、聞き読みを多く行った學生とほとんど行なわなかった學生との間に英語力の伸びに違いがあるかどうかなど、より具体的な考察を行ないたい。

謝辞

本研究を進めるにあたり、平成20年度石巻専修大学の研究助成を受けたことを記し、ここに謝意を表す。

注

- (1) 酒井邦秀・神田みなみ編著（2005）『教室で読む英語100万語』大修館出版、古川昭夫・伊藤晶子（2005）『辞書を捨てれば英語が読める 100万語英語多読入門』コスモビア。
- (2) 野呂忠司（2009）「多読によるインプットをアウトプット活動につなぐための実践」『英語教育』Vol.58 No.2 p.17.
- (3) I.S.P. Nation（2008）*Teaching Vocabulary: Strategies and Techniques*. Heinle, Cengage Learning, pp.69-82.
- (4) 氏木道人（2009）「語彙、文法学習における多読の意義」『英語教育』Vol.58 No.2 pp.20-21. 古川照夫（2010）『英語多読法』小学館 pp.66-73.
- (5) 門田修平、野呂忠司（2001）『英語リーディングの

英語の苦手意識克服をめざして

認知メカニズム』くろしお出版 pp.135-146、野呂忠司 (2009) pp.17-18.

(6) 英語Cでは、多読を行なえるクラスサイズを念頭に、2007年度から50名の人数制限を設けている。受講希望者はそれぞれ2007年度60数名(ガイダンス時の登録者数)、2008年度100名(以下初回授業時出席者数)、2009年度90名、2010年度80名であり、抽選で受講者を決めている。

(7) 読みやすさレベル(YL)とは、SSS英語多読研究会が日本人の英語学習者を対象に独自に難易度を統一的に定めた基準である。範囲はYL0.1~YL9.9。古川昭夫ほか(2010)『英語多読完全ブックガイド(改訂第3版)』コスモビア。

(8) 門田修平・玉井健(2004)『決定版英語シャドーイング』コスモビア、門田修平(2009)「インプットとアウトプットをいかにつなぐか」『英語教育』Vol.58 No.2 pp.10-13.

(9) TOEIC Bridgeは、TOEICの特徴を備えつつ、初・中級レベルの英語能力測定に照準を合わせて設計されたテストである。問題数と制限時間はそれぞれTOEICの半分(リスニング50問リーディング50問の

合計100問、1時間)で、英文レベルもより基本的なものになっている。本来は180点満点で各問題の難易度に応じた複雑なスコア調節があるのだが、今回は単純に1問1点、100点満点の素点計算で点数を出した。

(10) 学習塾であるSEGでは中1から高3まで多読を継続し、豊田高専の電気・電子システム工学科では5年間継続の多読授業を実施している。古川照夫(2010)『英語多読法』小学館、西澤一ほか(2009)「英語運用能力に与える英文読書量の影響(2)」『平成21年度工学・工業教育研究講演会講演論文集』pp.278-279.

(11) 高瀬敦子(2008)「やる気を起こさせる授業内多読」『近畿大学英语研究会紀要』Vol.2 pp.19-36、黛道子(2008)「レベル差に応じた対応をめざして——2006年度多読授業の分析と考察」『日本多読学会紀要』Vol.2 pp.18-28など。

(12) 千田潤一・鹿野晴夫(2002)『TOEIC friends.net English Training Book』国際コミュニケーションズ。

(13) 高瀬敦子(2010)『英語多読・多聴指導マニュアル』大修館書店 pp.72-75,177-78.

(14) 古川(2010) pp.89-96.

(15) 高瀬(2010) pp.29.